

絵本三昧

(2) 絵本の伝え手の視点から

宮地 敏子

「読み聞かせ」から「読み合う」へ

一九八一年だからちようど二十年前になる。五歳の次男はニューヨークの幼稚園に入り、当初蕁麻疹と頻尿とチックにとりつかれた。医者には不適応による心因性のものだといったが、本人はいたって楽しんで、そうに毎日通っていたのである。日本では相当にや

んちゃだった彼の、自分を表現できないもどかしさが体になつて理解できた。その頃になると、友達もわり先になつて理解できた。その頃になると、日本語より先に英語が出るようなこともおこつてきた。ちょうどそんな時、若いお母さんから、絵本の読み聞かせの会をしたいと持ち掛けられた。異年齢の子ども

たちと日本語の集団で遊ぶこともできると思い「おはなしなあに？」の会を始めた。月に一回のことだったが、絵本を持ち寄って回覧したり、行事を企画したり、子どもたちだけでなく母親の情報交換、精神安定の場ともなり、四年後の帰国までとぎれることなく続いた。

「おはなしなあに？」には、おむつをした赤ちゃんから、二年生ぐらいまで毎回五名から多いときでも十四、五名の参加者があった。初めからまったくの自由参加で、毎回付き添う人、口コミで隣町から参加する人、ベビーシッターがわりに子どもを預けて用事を足す人と、母親の意識もまちまちだった。

それでも、四季折々の行事には参加する母親たちも多く、発足の意図である日本語の環境を楽しく与えることは、ある程度できていたように思う。

だいたい私が「読み聞かせ」おばさんだったのだが、子どもがお気に入りの一冊をもつてくることも

半ば慣例になっていて、その子のお母さんが皆に読み聞かせた。ある時、日本から田舎のおばあちゃんを送ってくれたという幼児雑誌をもつてきた常連サンの男の子がいた。「シユワツチ」とか「バーン」とか「ガツン」とかのことばしかない戦闘場面が続き、最後には正義の味方が勝つ。ほんの数場面を、ことばになまりのあるお母さんがなんとも恥ずかしそうに、ゆっくりページを繰って丁寧に読んだのだ。それを見聞きしている子どもも得意満面の顔！ほかの子どもたちもヒーローの登場に大喜びだった。

「こんなもの読んでいいんでしょうか」「わたし、読むのとてもへたなんです」、事前にそのお母さんは私に言った。迫力満点に「シユワツチ！」と私が読んでいたら、あの得意満面の子どももいい表情を見ることはできなかっただろう。そのお母さんは、いわゆる善い絵本という固定観念から自由で、子ど

もが喜ぶのがとても嬉しいという原始の感性を豊かにおもちだった。頭でっかちで大人から子どもへと
いう「読み聞かせ」理解に疑問をもつきっかけに
なったできごとだった。

「おはなしなあに？」の後、帰国してカルチャーセンターや「祖師谷親子読書会」さらに附属幼稚園のブック・トークなどで、絵本の伝え手を細々続けてきた。そして、今はニューデリーの日本人学校幼稚園部で、同種の集いをしている。この二十年弱の絵本の伝え手体験のなかで、「読み聞かせ」から「読み合い」へと、明確に自分自身の意識が変わった。



読み聞かせるのは親なのだが、子どもと親が同じ絵本を読み合う中で、親が確実に変わっていく。私も、読み聞かせて、子どもの感じ方に驚かされたことが幾度もある。例えば『はらぺこあおむし』（エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社）を、毎晩繰り返し読んでいたことがあった。ある夜、突然「おにいちゃん、こえ（れ）すぐちようちよになるの？」と弟が聞いた。さなぎから蝶になるには、そのころ庭で毛虫とさなぎに魅せられた彼には、一ページ分では到底足りなかったのだ。間もなく彼はこの絵本から卒業し昆虫図鑑に熱中し出した。

ブック・トークには、記録を自由意志で参加者に書いてもらってきた。読んでもらう子どもの喜びはもちろんだが、子どもとのひとときを楽しんでいる親の様子がよくわかる。記録からは、教育のために「読み聞かせる」というよりも、子どもたちの反応に驚き、考える、学ぼうとする親の姿を強く感じて

きた。「読み合う」ことから、子どもを理解し、自分も成長する実感を得ているのだ。

読み合うことは喜びの共有体験

この、読み合うことが、喜びの共有体験になるには、三つの要因があるようだ。

一つは、絵本は、生を肯定しているということだ。自立しかつ共生できる人間などと教育の目標のようによくいわれるが、いずれも生を肯定しなればはじまらない。読んでもらう子どもが自分を重ねる絵本の主人公は、生まれたこと、生きていること、生きることを完全に肯定している。なんとという安心感、励ましであろう。

日々が冒険の積み重ねである乳幼児期、子どもたちは『はじめてのおつかい』（筒井頼子作、林明子絵、福音館書店）『こすずめのぼうけん』（ルース・エインワース作、堀内誠一絵、石井桃子訳、福音館

書店）『ちいさなヒッポ』（マーシャ・ブラウン作、内田莉莎子訳、偕成社）『はじめてのおるすばん』（しみずみちを作、山本まつ子絵、岩崎書店）などを、最後にほっとした溜め息が出るほど喜ぶ。「はじめて」の体験に伴う不安や困難を勇気を持って乗り越え、受け入れてもらうことを描いているので、主人公のように次に生きていく一歩が歩めるのだ。『さっちゃんのまほうのて』（たばたせいいちほか共同制作、偕成社）をはじめ障碍をテーマとする絵本は、「あるがまま」の尊さを、子どもにも大人にも伝えてきた。『ひろしまのピカ』（丸木俊作、小峰書店）は、絵の炎に熱さを感じ「生きていたい、戦争は嫌だ」と体を震わせて言った子どももいた。近年増えている高齢者が登場する絵本も、『エマおばあちゃん』（ウェンディ・ケツセルマン文、バラ・クーニー絵、徳間書店）のように、個性的に生きる人間像が多い。『葉っぱのフレディ』（レオ・

バスカーリア作、みらいなな訳、童話屋）は生誕から死まで一貫して「存在」を肯定している。

絵本を読み合うのは親子で互いの生を肯定し合う機会が与えられているということなのだ。

二つ目は、子どもと同じ絵本を読み合うことで、子どもを発見し、その感性に添うことを学ぶことだ。多くの母親が「こんなことを言った」と驚いて喜んで報告する。『やあ、ともだち!』（クリス・ラシユカ作、泉山真奈美訳、偕成社）で、積極的にみえる「この黒人の子も友達がいな子だ」と次男がつぶやいたという手紙がある母親から受けたのは、ブック・トーク後四か月たってからだった。

日常、子どもが行う言動をチェックして、注意し、指示し、命令することが多いので、子どもの内面を「聴く」機会が意外に少ないと親は反省する。

そして、この絵本にこんな感想を言ったと、わが子の感性に驚き感心し、その成長を喜ぶ。

三つ目は、「今、ここ」に本がある環境が、自然に、家庭内に文化的なうるおいをもたらす喜びだ。

最近父親の育児参加が喧伝されるが、父親が子どもと絵本を読み合うことが確実に増えているようで嬉しい。どうしても、接触時間が限られるので、子どもとの会話が生まれやすい絵本の時間を親子ともに喜ぶようだ。豊かな内容をもつ絵本、絵画芸術でもある絵本は、開けばそこに次元の異なる時空があるわけで、日常レベルと違う、小さな虫一匹花一輪から宇宙まで、太古から未来までの自由な世界を私たちに与えてくれる。

ブック・トークが終わると、絵本の力でさわやかにまた優しい気持ちになった親たちの笑顔を必ず見ることが出来る。絵本を伝える仕事は、だからやめられない。

（洗足学園短期大学・デリー大学）